

掛川市「生涯学習まちづくり」と地域社会の形成 —草創期の展開から—

How the Kakegawa City “Lifelong Learning Community Development” Movement Shaped the Local Community

コミュニティ福祉学科 志 田 倫 子

1 問題の所在

本稿は、生涯学習まちづくりを行う都市として最初に名乗りをあげた掛川市をとりあげ、その草創期においていかに活動が展開されたかを分析することを目的とする。コミュニティ形成において「生涯学習」が重要なテーマの1つであることは周知の通りである。特に掛川市はもともと社会教育が充実していることで知られていたが、その内容を活用しながら特徴的な生涯学習まちづくり運動を展開させた。しかし、その独創性が注目されると同時に、コミュニティづくりの視点からの分析はあまりなされていない。そこで、具体的な取り組みを理解すると同時に、いかにコミュニティ形成がなされているのかという観点から分析を試みたい。

まず、いかに掛川市が生涯学習に取り組むようになったかを概観したい。静岡県掛川市は昭和54（1979）年に市制25周年を記念し、全国に先駆けて「生涯学習都市宣言」を行った。この宣言は「都市づくりは人づくり、人づくりは生涯学習」を方針とし、その展開に向けて掛川市独自の生涯学習が、市行政（当時は榛村純一市長）主導のもとで積極的に推進されていった。

当時、榛村市長によって提起される独創性に富んだ数多の多彩な諸施策が、掛川市生涯学習運動として長期にわたって展開され、これらは、絶えず市長自らの手で工夫と改変を加えて市民運動として展開されてきた。この掛川市生涯学習運動の展開と市民の活動は、全国的にも注目され、ひとつの時代をつくったといえよう。

この掛川市生涯学習運動は、榛村市長の在任中の昭和54（1979）年から平成17（2005）年まで続いたが、これは行政資料⁽¹⁾によるとパートⅠ、パートⅡ、パートⅢにわけて捉えられている。生涯学習都市宣言の翌年の昭和55（1980）年から、その実践計画として生涯学習10カ年計画パートⅠがスタートし、その後平成2（1990）年には、パートⅡがスタートした。そして、平成12（2000）年にはパートⅢがスタートし、ハード、ソフト両面にわたり25年間生涯学習まちづくりが進められてきた。その後市長が交替したが、後の市長のもとで榛村市長が推進した生涯学習運動の構造を基盤に、行政を挙げて住民が主役となる「生涯学習まちづくり」の推進を図っている。

筆者はこの展開を捉えるために、次の3部の構成のもとに研究を進めてきた。

第1部：パートⅠの草創期における掛川市生涯学習の構図

第2部：パートⅡ、パートⅢにおける生涯学習「とはなにか学舎」の講座システムの分析⁽²⁾

第3部：掛川市生涯学習の今日的展開

本稿は、第1部に当たる草創期のほぼ10年間の運動に注目して、その内容を考察していきたい。即ち、後に市民講座として体系化される「とはなにか学舎」との関係を視野におきながら、当時の生涯学習運動が地域社会の形成にいかに関与してきたかを考察し、報告したい。当時の榛村市長によって提起され、積極的に推進された数多の多彩な生涯学習運動はきわめて独創性に富んだ取り組みと思われ、これらの諸施策がいかに掛川市を舞台に展開し、地域社会の形成（コミュニティづくり）に機能してきたかを考察する。

2 分析視点としての地域社会の形成

本節では研究の意義と、研究の方法つまり地域社会の形成をとらえるための分析視点を説明する。

2. 1 研究の意義

「地域社会の形成」を広義に定義すると、「市民、住民が主体となって、生活の場である地域社会の“魅力と住みよさ”をめざして、地域の課題や生活関心に取り組む、協働の活動である」と規定できる。日常的に使われている「都市づくり」、「まちづくり」、「地域づくり」、「村おこし」等も含んでいる。

今敢えて「掛川市生涯学習まちづくり」を取り上げる意義は、掛川市の生涯学習まちづくりをとおして、地域社会の形成の意味をもう一度確認してみたいからである。ここで、地域社会の形成の必要性が叫ばれてきた経緯を簡単に概観しておきたい。昭和44（1969）年に周知の報告書「コミュニティ生活の場における人間性の回復―」⁽³⁾が出されて以来、コミュニティという言葉が浸透し、「コミュニティづくり」が、国、地方自治体主導のもとで全国的に展開されてきた。今日的意味におけるわが国の「地域社会の形成」の発端といえる。

こうした地域の現状において、「掛川市生涯学習まちづくり」は、掛川市が市をあげて取り組んだ掛川のための取り組みであり、行政主導でありながら、掛川市という包括的な「コミュニティ」の活性化のために行われた、いわゆる地域性を基礎とした土着型の活動であるといえる。そこで、本研究ではこうした特徴ある取り組みを振り返ることで、「コミュニティ形成」の意味をもう一度確認してみたい。とくに、当時、市長が強調し、主導してきた遊び心のあふれた活動の中に、コミュニティ形成の楽しさ、いわゆる掛川市の特徴を確認することができる。またいわゆるコミュニティブームといわれる初期の1970年代から2005年までの25年余の長期にわたって推進してきた「掛川市生涯学習運動」にみられる、多彩な密度の濃い取り組みがどのように展開し、市民、住民に影響してきたかを理解することは、今後の地域社会の形成にとって、重要な意味をもつものといえよう。

2. 2 研究の方法

ここでとりあげる草創期における掛川市生涯学習運動を分析するにあたって、前述した諸点を考察しながら、次の分析視点を設定したい。

まず、掛川市の生涯学習運動の草創期の取り組みを文献によって理解する。その上で、コミュニティづくりの方法から取り組みを分析することによって、いかにコミュニティづくりがなされているのか、どのようなねらいを持って行われてきたのかを明確にしたい。

そこで、コミュニティづくりの方法として良く知られている次の3点を分析の視点としたい。人間関係が希薄化した時代のコミュニティづくりの方法として指針として示された①行政と地域住民とのフィードバック・システムの確立 ②活動主体となる住民の組織化とコミュニティ・リーダーの養成 ③コミュニティ施設の建設と住民による管理、等である⁽⁴⁾。

当時、榛村市長が提唱し実践する活動は、独創性豊かでユニークで活動も膨大で、圧倒されるものであった。その内容は、掛川市の生涯学習運動を特徴づけているものの、言い換えると体系的に行われたとは言い難かった。そこで本稿では、この取り組みの内容について紹介すると同時に、整理を試み、前述した当時の報告書や、当時自治体を用いた典型的手法を分析の視点として、市長が意図したことは何か、すなわち「コミュニティ形成の観点からみて何が行われていたのか」を明確にしていきたい。

3 草創期における掛川市生涯学習運動の展開

掛川市で生涯学習都市宣言がなされた時点で、その目指す方向が「生涯学習運動を始めた理由とまちづくりの基本課題」と「掛川市の生涯学習運動の特色」という内容に具体的に示されている⁽⁵⁾。その後、この方針のもとでの実践が、計画的に行われている⁽⁶⁾。これらの方針は、当時の市長が打ち出した独特の表現をそのまま用いて資料に記載されているため、その内容を他の文献等⁽⁷⁾をもとに解釈したい。その上で、第2節で取り上げた分析枠組みを用いて、コミュニティづくりの観点から分析を行いたい。

3. 1 掛川の生涯学習まちづくりとは

ここではまず、「生涯学習」と「まちづくり」がいかにつながるのかを、簡単に冒頭で理解してみたい。コミュニティづくりをする際に、まず、地域の特徴、掛川ならではの魅力を発掘しなければならない。その学習の部分が生涯学習となる。また、市長の考えを聞き、掛川市が目指している方針を理解する部分も生涯学習であろう。また、市長が推進する報徳思想等を身につけていく部分も、生涯学習といえるであろう。生涯学習できる都市の仕組みづくりも生涯学習といえるだろう。そうした内容を、地域の人と共同で学習していくこと自体が、「地域性」「共同性」に配慮した地域づくりと言えるだろう。そして、その知識を活かして、地域を活性化させていく活動に結びつけるのは、まさにコミュニティづくりといえるだろう。

3. 2 生涯学習運動を始めた理由とまちづくりの基本課題

まず、掛川市の草創期の施策を紹介していきたい。「生涯学習運動を始めた理由とまちづくりの基本課題」を市民に提示している。その内容は、以下の5点にまとめられている。以下、(1)～(5)まで文献の内容を載せ、その解釈を試みたい。

- (1) 過疎地の村づくり、人づくりから生涯学習運動へ
—随所の時代という時代認識に立ち、選択的住民の誇りをもち、過疎化を乗り越える
- ・ 哀しい矛盾の図式と東京一極集中問題。紅葉の美しい所は貧しく、緑の豊かな所は不便、小鳥のさえずるところは淋しく、水清い所は住みにくく…
 - ・ 随所の時代とは、各地域がところどころの特色に従ったまちづくりを
 - ・ 宿命的（逃れることのできないさま）な住民から選択的住民へ

サブタイトルの部分は、直訳すると、「地域の特色を出すまちづくりを、という時代認識のもと、自ら望んで過疎地に住んでいることに誇りをもち、過疎化を乗り越える」と書かれている。すなわち、紅葉の美しい、緑豊かで小鳥のさえずりが聞こえ、水清い、田舎である地域の魅力に気付き、誇りのもてる過疎地の村づくり、人づくりから、生涯学習運動を目指す。

(2) 教育の原点に帰ること—教育に関する2つの誤解・先入観・偏向を正す

(2)－1 自然と地域と両親を乗り越える教育から、自然と地域と両親を学び、尊敬する教育へ

(2)－2 大人は教育が済んだものではない、教育は学校だけでするものではない

生きることは自己教育である—自ら成長するものだけが人をよく成長させる

(2)－1を説明すると、時代の特徴として「自然」を破壊し都市を作る、「地域」より充実した都会に向う、学校教育の充実により「両親」より高学歴となり、両親を尊敬しなくなっている。このように、自然と地域と両親を乗り越える教育から、これらを学び、尊敬する教育が大切と言っている。(2)－2を説明すると、逆に親に対してのメッセージであり、大人は教育が済んだものではない、教育は学校だけでするものではない。生きることで、自己教育を行っていく。このように自ら成長するものだけが人をよく成長させる、と生涯学習の大切さを説いている。ここでは、生涯学習として一貫して住民・市民の意識の啓発を主張し、展開してきている。

(3) 行政の役割はムード（やる気、郷土愛、市議・職員の使命感）を醸成すること

- ・ ハードウェアからソフトウェアへ
 - ・ 五要素そろった真に健康な市民、救われた市民の大勢いる都市に
- (3)－1 身体的健康…体の丈夫な人、病気のない人、医師にかかったことのない人
(3)－2 精神的健康…心のできた人、教養のある人、気持ちのいい人、落ち着いた人
(3)－3 社会的健康…思いやりのある人、世の役にたつ人、世話好きな人、明るい人
(3)－4 経済的健康…ある程度の収入の安定性、年金等を受けている人

(3) - 5 家族的・生涯学習的健康…家族みんなが元気、親子孫三代の健康がある人

行政の役割は、ムードを醸成することと説いている。すなわち、やる気や郷土愛、使命感を身につけていかなければいけない。こうした、人間性の充実を目標にしている。そして、偏りのある人間性ではなく、五要素の健康を目指し、常識的な感覚を身につけたバランスのとれた「健康」な市民を育てたいと考えている。

(4) 地域の人材資源、観光資源、活性化資源、教育資源（教材）を育て磨くこと

- ・ マイナス条件をプラス条件に一流れを変える三つのロマン
(定住圏、掛川学事始、新幹線掛川駅)
- ・ “三しか文化” (ここしか、今しか、これっしか) —お国自慢づくり、お国自慢をいえる市民の育成

地方圏において、安心して暮らせる地域を形成して、地方圏からの人口流出を食い止める。そのために地域の人材育成や観光資源、活性化資源、教育資源を育て磨くこと。新幹線掛川駅を作り、「掛川学事始」で掛川を学び、掛川ならではの文化「ここしかないもの」をつくり、それを言える市民を育成する。これらは、地方活性化のロマンである。

(5) 女性の参加システムの活性化を一女性の一生の活性化が鍵をにぎっている

- ・ 女性は、①娘、②妻、③母、④嫁、⑤姑、⑥お婆さん、⑦職業婦人 の妖怪七変化人生
- ・ 女性は東京が好きな四つの理由・意味を考え、女性が好きなまちに、女性が輝くまちに、教育ママから“生涯学習ママ”に

女性の一生の活性化が鍵となっていることから、「女性の参加システムの活性化をはかること」を重要視している。女性が結婚後「母」「嫁」としての役割のみを期待されて地域社会の中であまりてしまうのではなく、一生を通じて充実できるように、社会（仕事や文化活動）の中で自分磨きができるようになる“生涯学習ママ”になれるような仕組みづくりを目指す。

3.3 掛川市の生涯学習運動の特色

さらに、掛川市は次の諸点を運動の特色として指摘している。

(1) 発想の原点…市長の公約から

- ・ 森林・山村・木の文化・過疎問題と報徳思想の土壌
- ・ 全市生涯学習公園化計画、シルバポリス（森の都）づくり、エコポリス、天竜浜名湖鉄道

掛川市の生涯学習運動の発想の原点は、市長のこれまでの具体的な公約にある。その内容は、森

林や木を活かした文化をつくる。市全体を緑豊かな公園化にする。そして森の都、すなわち樹木が多く、付近に森林のある都市をめざす。

さらに、報徳思想の土壌、すなわち二宮尊徳が説き広めた道德思想、経済と道德の融和を訴え、私利私欲に走るのではなく社会に貢献すれば、いずれ自らに還元されるという考え方を根付かせる。その他、工業団地（エコポリス）、天竜浜名湖鉄道を作る。

（2）三つのロマンと日本一づくり

- ・ 定住圏構想、掛川学事始（生涯学習）、新幹線新駅の設置運動
- ・ 掛川市の日本一づくり（生涯学習、掛川駅八景、ピアノ、バラ、お茶、葛布、小夜の中山 外）

過疎地といえる掛川の定住圏構想、掛川について学んでいく掛川学事始、新幹線新駅の設置、これらは三つのロマンといえるだろう。さらに、日本一として誇れるものを見いだす必要がある。例えば、生涯学習、掛川駅八景、お茶、葛布、小夜の中山等があげられる。

掛川の「生涯学習まちづくり」について、生涯学習とまちづくりをいかにつなげて考えることができるかについて考察してみたい。これは、市長の執筆した「掛川学事始」等を読み、掛川について学んでいくことが生涯学習であり、そこで得た知識をまちづくりに活かしていくという発想といえよう。例えば、生涯学習の活動の中で、郷土の歴史を学び「小夜の中山」について理解を深める。それを活かして観光スポットにしたり、案内書を作ったり、観光ガイドのボランティアをすることで、まちづくりに活かしていく方法が一例としてあげられる。

（3）都市づくりとともに、そして、三層建て生涯学習施設ネットワーク

- ・ 区画整理事業などの公共事業も生涯学習運動として展開
- ・ 人生即生涯学習、商売即生涯学習、市政即生涯学習、財政即生涯学習、都市づくり即生涯学習、人づくり即生涯学習
- ・ 小・中学校を地域の生涯学習センターに、地域の核に

三層建て生涯学習施設ネットワークは、特徴的な事業である。これは、前述したコミュニティ形成の手法である「③コミュニティ施設の建設と住民による管理」に当たる。コミュニティづくりの中で、先ずコミュニティ地区といえる範囲を設定し（ゾーニング）、その中に建物を建てるという手法が用いられた。従って、ゾーンを設定するような「区画整理事業」も生涯学習（まちづくり）である。その他、人生、商売、市政、財政等も、学びのテーマであることから生涯学習といえる。そしてこうした生涯学習を行う、学習施設が必要になってくる。そのために、まず小・中学校などの既存の施設を、地域の生涯学習センター、地域の核とした。

ここでは、「三層建て生涯学習施設ネットワーク」について、紹介していきたい。生涯学習社会の実現をめざす掛川市にとって、誰もが自由に使える学習施設・情報ネットワークの構築は欠かせ

ない。掛川市ではまず最初、既存施設を利用した「三層建て生涯学習施設ネットワーク」という方法で対応した。第一層とは、大字や自治区の人々が利用する集会所、公会堂、寺社、隣接公園など。第二層は、学区の人々が利用する小・中学校。そのため、夜間・土・日・祭日などは大人の活動拠点となるよう、各小学校には大人の集会研修施設を設置した。学校は、教育機能、緑化センター、運動公園、イベント広場、防災センターを総合する生涯学習センターの役割を担っている。第三層は、全市民が集まる中央施設群で、市庁舎、市立総合病院、農協本所、商工会館などがあてられ、この中心に生涯学習センターを建設した。1200席のホールとシンボルである円形ガラスドームの周りに“たまり場”的に使える会議・事務室群を配置したもので、生涯学習の一大拠点となっている。

市民住民は、これらの施設を使い分けて利用することで、地区毎の特色や活動を学び、市全体の動きも知ることができる。市では官民一体の生涯学習の推進に向け、各種のイベント・文化・スポーツ活動を推奨し、支援している。

このように施設ネットワークが生涯学習情報ネットワーク、人材ネットワークになっていく。これら三層建て生涯学習施設は、142の自治区と市で共催する市民総代会システムの基礎をなし、生涯学習都市の住民参加を基幹的に担保している。

（４）掛川学事始とムードづくりと女性尊重（女性が好きなまちに）

- ・ お茶の文化、フェミニズム市政、女性会議、年輪の集い
- ・ 地域特性をおもしろくPR、市長レポート、対話集会 外

掛川について知っていこう、という「掛川学事始」。例えばお茶の文化などが特徴的である。女性が好きなまちにするためにフェミニズム（女性解放）市政や、女性会議によって女性の意見を取り入れる。また、市長との対話を重要視しており、市長レポートや対話集会などを行う。行政のやることという、面白くない官僚主義という印象があるが、そうではなくムードづくりも重要。楽しみながら、おもしろく行っていくことが大切。地域特性もおもしろくPRしていく。さらに、年輪の集いについては、特徴的な取り組みといえ、ここでは榛村（1993）をもとに、詳しくみてみたい⁽⁸⁾。

榛村（1993）によると、高齢化社会と結びつけて生涯学習を説明する場合には、その運動は高齢化社会をマイナスと考えない運動であり、寝たきり老人、ボケ老人にならない運動であり、そういうプログラムをもったまちをつくっていくことであるとする。その実践のソフト事業として、年輪の集いという通過行事を行っている。

全国の町では、20歳になると成人式を行っているが、あとは勝手に生きていけとなっている。掛川では、成人式の後、30歳の式、40歳の式、50歳の式と10年きざみで、90歳の式まで、人生の祝賀会（仮決算の式）を行っている。

いまの人生が何となくシラケっぽくとげとげしいものとなっているのは、22歳までの学歴を勝負として、急ぐ教育に狂奔し、卒業大学を人生の決算として、人を評価しているからである。これか

らは、一生が勝負、人生はマラソンということで、生涯学習すなわち急がない教育を10年ごとに仮決算して、その成果を、冷やかしながら照れながら楽しくたたえ合って生きていく方法を確立すべきであろう。

このように、年を重ねても学び続け、自分の人生を生きる生涯学習の仕組みをつくっている。これは、コミュニティ形成の方法でいうと「②住民主体となる住民の組織化とコミュニティ・リーダーの養成」にあたるといえよう。まず、各年代別に実行委員会が組織され、企画、運営、実施がなされる。記念式典や講座、アトラクションやアンケートが実施される。こうした動きは、住民の組織化とコミュニティ・リーダーの養成にあたるといえよう。さらに、成人を公の場所に出して、同世代のネットワークを形成する。さらに、そこから、新しい動きにつながることもあるだろう。

（５）生涯学習10か年計画と市民総代会システム

- ・ 生涯学習10か年計画パートⅠ（S55～H1）、パートⅡ（H2～H11）
- ・ 市民参加と進行管理、ローリングのための市民総代会システム

生涯学習10か年計画、パートⅠとパートⅡをたてて、具体的に実践していく。市民総代会システムも特徴的な取り組みといえる。これは、コミュニティ形成のうち「①行政と地域住民とのフィードバック・システムの確立」にあたる。

内容を紹介すると、年度が始まると4月に「中央集会」が行われる。140の自治区三役と、市三役・部長が出席する。ここで、市長の話題提供及び施策方針の説明や、当該年度予算概要などが説明される。さらに、10～11月に「地区集会」が行われる。16の小学校区別とさらに1地域があり、全部で17会場で行われる。市長からの施政方針・話題提供、住民からの意見・要望・提言・アイデア等の聴取が行われる。そして、この様子は『市長区長交流控帖』により、地域と行政を結ぶ情報の伝達と記録管理が行われる。これらを反映して、予算編成がなされ、市議会が開催される。

以上、「市長の公約」を実施するという形で、市長が多彩なアイデアを打ち出している。なお、現在でも掛川市が挙げる3つの特徴的な活動があり、そのうちの2つは、前述した「三層建て生涯学習施設ネットワーク」と「市民総代会システム」である。現在も掛川市の特徴的な実践活動として、多少の改良を加えながら引き継がれている。また、これに加えて、「掛川市生涯学習まちづくり土地条例」（平成3年3月に議会で決定）も、3つめの特徴としてあげられるが、これはパートⅡの活動であるため、草創期であるパートⅠの分析を目的とする今回は割愛したい。

4. まとめ

本稿では、生涯学習都市宣言以降掛川市が展開していく、生涯学習運動の根底にある方針について、概観してきた。市長の啓発のもとで、地域の歴史・文化を守ることによって地域の魅力を発掘し、さ

らに集会施設、組織づくりを行う地域社会の形成が、独創的かつ勢力的に行われていった過程をここに把握することができる。①行政と地域住民とのフィードバック・システムの確立 ②活動主体となる住民の組織化とコミュニティ・リーダーの養成 ③コミュニティ施設の建設と住民による管理 に関しては非常に特徴的な形で営まれている。しかし、分析を試みた結果、独創的な活動の中でもコミュニティ形成の基本が盛り込まれていることがわかる。

「①行政と地域住民とのフィードバック・システムの確立」は、「市民総代会システム」で行われている。

「②活動主体となる住民の組織化とコミュニティ・リーダーの養成」は、「年輪の集い」の中でその特徴があらわれている。

「③コミュニティ施設の建設と住民による管理」は、「三層建て生涯学習施設ネットワーク」で行われている。

さらに、緑豊かで自然に恵まれた地方都市の長所を生かしたまちづくりや、ハード面とソフト面の両面の充実は、掛川市独自の特徴といえよう。また、市長との対話が積極的に行われており、市長から市民への意識啓発が重視されているのも、掛川市独自の特徴といえよう。

しかし、掛川市生涯学習運動のパートⅠ、いわゆる草創期の運動は、確かに多様かつ独創性に富み、きわめて勢力的に展開されてはきたが、一貫して住民・市民に対する行政（市長）主導の運動であることに特徴がある。

地域社会の形成にむけて、行政と市民がフィードバックしながら、かつ主体的な運動を推進する地域づくりのリーダー養成を体系的に展開する掛川市生涯学習運動は、このパートⅠに続く、パートⅡの生涯学習の体系化、即ち、学習講座「とはなにか学舎」の設立と展開に移されることになる。

（注）

- （１）静岡県掛川市 『平成25年度版 生涯学習社会の実現をめざして～掛川市の生涯学習まちづくり～』
- （２）2014年度の日本社会教育学会では、第２部に当たる掛川市生涯学習運動のパートⅡの平成7（1995）年に開設された、市民向けの学習講座「とはなにか学舎」に視点を向けて、学舎形成までの経緯と講座システム、すなわちカリキュラムが「地域社会の形成（地域づくり）」の観点からみていかに構成されているかを分析し、考察している。
- （３）国民生活審議会調査部会 コミュニティ問題小委員会報告1969『コミュニティ生活の場における人間性の回復一』（鈴木広・高橋勇悦・篠原隆弘編1986『リーディングス日本の社会学 7 都市』東京大学出版会に抄録）
- （４）例えば、江上渉「第6章 コミュニティと暮らしの変化」p123-p125、高橋勇悦・菊池美代志編著1995『今日の都市社会学 第三版』学文社、を参照。
- （５）掛川市生涯学習部企画人材課 平成8（1996）年『生涯学習都市をめざして一掛川市の生涯学習運動一』

(6) 以下の内容は、本文で記した構想のもとに行われた実際の内容である。実現したのは草創期とは限らないものの、市長の任期中に実現された内容をあげたい。

- ① 掛川学事始め・地域学のすすめ（例：市長レポート307回発行、市長による多数の著書刊行、市民対話数回3200回等による地域学習）
- ② 潤いのあるまちづくり・歴史と文化が息づくまちづくり（例：駅南通り線の整備、掛川城天守閣本格木造復元、城下町風まちづくり、城下町風デザインによる東名掛川インターチェンジ等）
- ③ 市民総代会システム（自治区の中央集会、小学校区の地区集会、市政の広報・広聴等による市民集会）⇒ 行政と地域住民とのフィードバック・システムの確立
- ④ 三層建て生涯学習施設ネットワーク（第一層：自治区施設群、第二層：学区施設群、第三層：全市民が集まる中央施設群—中央生涯学習センター等）⇒ コミュニティ施設の建設と住民による管理
- ⑤ 年輪の集い（成人式以後、10年ごとの節目に人生を味わう催しと、各年代別の実行委員会による企画、運営、実施）⇒ 活動主体となる住民の組織化とコミュニティ・リーダーの養成
- ⑥ 女性会議（洗練された女性活動のすすめ、模擬市議会で女性が提言する）
- ⑦ 全市生涯学習公園化計画（本格的に緑化された価値ある都市づくり）
- ⑧ 全市創造の図書館化計画（まち全体を生涯学習キャンパスに。「とはなにか学舎」の開講など）
- ⑨ 新幹線掛川駅の実現と駅前広場の美学
- ⑩ 生涯学習総本山パークづくり（新市庁舎など全国への生涯学習都市情報発信基地とする）
- ⑪ オレゴン生涯学習村設立（農場72haと森林リゾート5ha経営）
- ⑫ 「掛川市生涯学習まちづくり土地条例」の制定（市民の生活と学習の場としての適正な土地利用等）
- ⑬ 生涯学習シンポジウム（「地域のまちづくり」に関する十数回にわたるシンポジウムの開催）
- ⑭ その他にも、生涯学習メンターの設置、生涯学習推進市民大会を毎年開催（シンポジウム、実践発表、後援会、実践団体の表彰等）

(7) 内容の理解のために、榛村純一平成5（1993）年『地球田舎人をめざす』清文社、掛川市2002『とはなにか問答の楽しいまち 掛川36景—掛川市というテーマパーク—』コンセプト創造屋工房 を主に活用した。

(8) 榛村純一1993『地球田舎人をめざす』清文社